或 問 WAKUMON 101
No. 3 (2001) pp. 101～104

“化石”考源*

黄 河清

沈括は『夢渓筆談』の中で化石に言及している。同書第二十一巻「異事」に、“竹筍化石”、“蛇蜃化石”と題した2編の文章がある。ただしタイトルに用いられている2カ所の“化石”はどれも熟語ではなく、動詞・目的語からなるフレーズであることは明らかである。意味は“石に化す”であり、述語成分である。

“竹筍化石”は植物の化石、“蛇蜃化石”は動物の化石を指している。“竹筍化石”の中で沈括は次のように書いている。

近年延州永寧關大河岸崩，入地數十尺，土下得竹筍一林，凡數百莖，根干相連，悉化為石。

——近年、延州永寧関にある黄河の岸が崩れ、地が数十尺もめり込み、地中に筍がたくさん現われ、およそ数百本の茎、根、幹が連なり続き、すべて石に化している。

この“化為石（石に化す）”もまた動詞・目的語構造のフレーズである。“化為石”は後の文献（特に清朝後期の文献）によく見られる。1866年、斌椿は『乗槎筆記』の中で次のように記している。[1)]

觀公所，鳥獸各骨，有取于山石及海中者，骨化為石，尚可辨認。

——役所の中を見ると、山や海から取り出した鳥や獣の骨は石に化し、まだ識別することができる。

また1866年に、張徳彝も“化為石”を用いている。[2)]

古多奇獸，其形亦奇，死于山內海邊，久則化為石矣。

——古代、珍しい獣が多く、その形もまた珍しかった。山中や海辺で死に、長い間かけて石に化す。

このほか、崔国因が1893年にアメリカで書いた日記の中でも次のように、“化為石”を用いている。[3)]

古棺一具盛骸一具，亦由地中掘得，均化為石

——古い棺一つに骸を一体収容し、地中より掘り出したものもまた、すべて石に化す。

沈括が“竹筍化石”や“蛇蜃化石”の形で用いていた“化石”は、清末にも使われていたことが分かる。1877年、郭嵩燾はロンドンの博物館を見学した時、動物の化石を目にした。彼は日記にこう記している。[4)]

一獸骨高逾丈，嘴尖若橐駝，四蹄有爪，長七八寸，身旁巨骨，与石無異，云地中掘得之，不辨為何物。疑盤古未開辟時所有，陷入地中近万年，骨皆化石。……穿山甲一具，狀如石缸，尾長二尺許，鱗甲皆已化石，則竟疑為盤古以前物矣。

——一匹の獣の骨は一丈を超える高さ、口の先は駱駝のよう、四つの蹄には爪があり、長さは七、八寸、巨大な骨は、石と同じである。地中より掘り出したもので、何物かは分からないという。天地開闢以前からの動物で、一万年近く地中に埋まり、骨はすべて石に化けたのではないかと思う。……センザンコウ一体、形状は石のかめ（鉢）のよう、尾の長さは二尺あまり、うろこと甲羅はどれもすでに石に化していた。天地開闢以前のものではないかと思った。

ここでも“化石”が2箇所用いられているが、沈括と同じく“化為石”の意味であろう。

沈括及びその後の人たちが用いた“化石”、“化為石”はまだ単語ではなく、フレーズの範囲に属すものであったが、名詞としての“化石”のために準備を整えたと言える。

ちょうど動詞・目的語構造の“化石”、“化為石”が頻繁に使われていた時、名詞としての“化石”がひそかに登場した。1876年、李圭は『環遊地球新録』の中で次のように述べている。[5)]

已正，又偕游博物院，亦仿西法開設，廣人見識者。每人以寛永錢五十文購木牌，始可進院。内列各國貨物机器，各种化石，有枯木成石，骨殖成石。皆歴久所變化者。

——二七日、また共に博物館を見学した。西洋に倣って開設したもので、人々の見識を広げるためである。一人寛永銅銭五十文で木製の札を買い、入館する。中には各国の品物や機械やそしていろいろな化石が陳列されている。（化石は）枯れた木や遺骨が石となったもので、いずれも長い年月を経て変化したものである。

これはいままでのところ、筆者が探し当てた最も早い名詞として用いられた“化石”の用例である[(1)]。

以上のことから、名詞の“化石”は、動詞・目的語構造の“化為石”、“化石”から発展し変化してきたことがわかる。

名詞の“化石”は19世末にすでに現れていたが、広く世に伝わらなかった。なぜなら、当時化石を指すのに別の語を用いていたからである。しかもこの語はよく知られていた。それはつまり“僵石”である。例えば、瑪高温と華衡芳共訳の『地学浅釈』に次のようにある。[6)]

地中海之大島其石層中滿螺蛤僵石，其形類與今時地中海所生之螺蛤無異。

——地中海にある大きな島の石層は貝の化石に満ち、形状や種類は現在の地中海に生息する貝と同じものである。

厳復も“僵石”を用いている。彼が著した『天演論』の中に“僵石”は計2回出ている。また康有為も次のように“僵石”を用いている。[7)]

七日游博物院。院制壯偉，体制亦倣倫敦，但遜其大耳。然印度最多古物，則亞洲以此院為第一矣。其最資考證者，以物質僵石為最。有大象僵石，牙長二丈，首亦几丈。

——七日間かけて博物館を遊覧した。博物館は立派に壮大に作られ、制度もまたロンドンを模倣している。ただし規模はロンドン博物館のほうより劣っている。しかるにインドは古いものが最も多く、アジアではこの博物館が一番大きい。最も考古学に役立つものは、化石である。中には象の化石があり、象牙の長さが二丈、頭部もまた幾丈かある。

1903年出版された問答式の書物、『西学関鍵』の中でも“僵石”が使われている。[8)] 本書では“何謂僵石？”という一節があり、専ら化石に関する知識を紹介している。梁啓超も何度も“僵石”という語を使っている。

19世紀末から20世紀初期にかけて、中国語では化石を指すために主に“僵石”が用いられており、“化石”の出番がなかったといえる。

その後、“化石”は20年余り沈黙したのち、20世紀初めに、ついに再び中国語に現れた。1903年『新爾雅』では、“化石”が次のように用いられている。[9)]

水成岩中，所含有之有機體遺蹟，謂之化石。

——水が岩の中に染み込み、含まれた有機体の遺跡を化石と言う。

その頃から“化石”が中国語に広く伝わり始めたのである。

1950年代末、北京師範学院中文系漢語教研組が書いた一冊の小冊子——『五四以来漢語書面語言的変遷和発展』がある。[10)] この本では“化石”は日本語から由来したと考えている[(2)]。しかし、このような意見に賛同しない学者もいる。例えば、イタリアのマシーニ氏（F. Masini）は“化石”は中国語のオリジナルの語だと考えている。[11)] なぜならば1886年の『和英英和語林集成』にまだ“化石”が見当たらないからである[(3)]。本稿の考察と考え合わせれば、マシーニ氏の意見は信用に足りうるものがある。

つまり、中国語の“化石”は次のようなプロセスを経たのだろう。“化石”は1870年代に現れたが、普及しなかった。その時、中国人は一貫して“僵石”を使っていた。恐らくこの時期に、日本人は“化石”という語を中国語から借用し、日本で広く使用したのだろう。20世紀初頭、日本語の語彙が大量に中国に戻ってきた時、“化石”も逆輸入され、“僵石”に取って代わって、次第に普及したのである。

＊本研究は、香港中国語文学会の助成を受けている。謹んで感謝の意を表する。

参考文献

1. 斌椿『乗槎筆記』長沙：岳麓書社1985年版127頁
2. 張徳彝『航海述奇』長沙：岳麓書社1985年版545頁
3. 崔国因『出使美日秘国日記』:『小方壺斎輿地叢鈔』収、杭州古籍書店第19冊第12帙1985年影印本145葉裏
4. 郭嵩燾『倫敦与巴黎日記』:王立誠校正・編集『郭嵩燾等使西記六種』収、北京：生活・読書・新知三聯書店1998年82頁
5. 李圭『環遊地球新録』長沙：岳麓書社1985年再版321頁
6. 『地学浅釈』第５巻上海：江南製造局翻訳館1873年1葉表
7. 『列国遊記―康有為遺稿』上海：上海人民出版社1995年11-12頁
8. 匯報館教士訳『西学関鍵』8巻上海：匯報館1903年46葉表
9. 汪栄宝・葉瀾『新爾雅』上海：明権社115頁
10. 『五四以来漢語書面語言的変遷和発展』北京：商務印書館1959年83頁
11. マシーニ著・黄河清訳『現代漢語詞匯的形成――十九世紀漢語外来語研究』上海：漢語大詞典出版社1997年215頁

訳者注：

(1)　李圭の「化石」は、日本神戸の博物館を見学する様子を記録する文脈の中に用いられているもので、中国人独自の使用例として扱うことができない。「寛永」は日本の年号である。

(2)　訳者が検索できた日本での「化石」の使用例を挙げておく。

『物類品隲』（平賀源内著1763）：

蛤蚌の類、石に化するあり。伊勢榊原村貝石産＜略＞以上五種皆文蛤の化石なり

『波留麻和解』（稲村三伯編纂1796）：

versteenen. 石ニ化ス　　versteeniging. z. v. 化石

『西洋事情』（福沢諭吉1866-70）：

旅行し山に登る機会を得ざれば地球の土性を目撃するに縁なし。故に博物館に行き化石の類を見て平生研究せし書中の説に参考する

『博物館学階梯』（中川重麗訳1877）：

化石は植物及び動物の変して石となりし者にして

(3)　『和英英和語林集成』の初版は1867年で、1886年版は第3版になる。なお本辞書は和語を中心に収録しており、「化石」のような漢字語がなくても不思議ではない。

竹村朋美訳